

令和 4 年 6 月 28 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00408

研究課題名(和文) ユダヤ系アメリカ詩の伝統なユダヤ的素材の援用と逸脱の系譜

研究課題名(英文) The Tradition of the Unconventional Usage of Jewish Conventions in Jewish American Poetry

研究代表者

宮本 文 (Miyamoto, Aya)

専修大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：90507930

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：ユダヤ人迫害やホロコーストの記憶を継承するユダヤ系アメリカ詩人がカディッシュを援用して、個人的・集団的に悼むという行為をしつつ、一方で「息子-父-神」というラインからどのように逸脱するのかを本研究のテーマとし、アレン・ギンズバーグのカディッシュについて論文を執筆した。しかし、研究の過程で、弔いや悼むという行為を考える上で、イスラエルとパレスチナの問題や地理的想像力を無視できないという知見を得た。そこで詩だけに限らず小説や戯曲に射程を広げながら、ユダヤ系アメリカ人の共同体にイスラエルとパレスチナを含めて考えるネイサン・イングラントンのカディッシュを扱った作品について論文を執筆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ユダヤ系アメリカ人がアメリカのなかで社会的にも経済的にも上昇するにつれ、ユダヤ系アメリカ文学はユダヤ系の形容詞なしでアメリカ文学として読まれるようになった。が、敬虔なユダヤ教徒でもなければ、ユダヤ人であることにあまり重きを置いていないように見えるユダヤ系の詩人・作家たちが、ユダヤの伝統や慣習などを本来とは異なる形で援用し、ユダヤの問題に限らず、より個人的あるいはより広く集団的なアクチュアルな問題を扱った作品を書いている。これらのことに注目することによって、「ユダヤ人とは何か」という問題自体を問い直し、歴史(共同体)と個人の軛にあるユダヤ系アメリカ人作家の抱える問題を現在まで辿ることができる。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify how Jewish American poets, who inherit the memory of Jewish persecution and the Holocaust, deviate from the "son-father-God" line while mourning individually and collectively with reference to "Kaddish." From this perspective, I wrote a paper on Allen Ginsberg's Kaddish. Then, as I engaged in the research, I realized that the Israeli-Palestinian Conflict and the geographical imagination could not be ignored when considering Jewish writers' acts of mourning and lamentation. Therefore, focusing not only on poems, but also novels and plays, I wrote an article on Nathan Englander's literary works on "Kaddish." He includes Israel and Palestine in the Jewish-American community in his imagination.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：ユダヤ系アメリカ文学 ユダヤ系アメリカ詩 カディッシュ エレジー アレン・ギンズバーグ チャールズ・レスニコフ

1. 研究開始当初の背景

当初の背景には課題担当者が行った二つの課題研究があった。2010年度～2011年度、若手研究(B) 研究課題名「オブジェクティヴィストの詩の技法におけるイディッシュ語の影響」では、特にチャールズ・レズニコフの『証言』の技法と語りが伝統的な詩型であるバラッドと相似していることに注目し、イディッシュ・バラッドを定点としてレズニコフの詩の技法におけるイディッシュ語の影響を探った。また、上記の研究課題から「母子/父子関係」と「言語」という視座を得て、2012年度～2013年度には若手研究(B)「オブジェクティヴィストにおける家族と言語の問題とイディッシュ語の影響」を取得し、聖なる言語とされるヘブライ語の領域に属するものと父子関係を通して描かれるものとの結びつき、それに対して俗なる言語とされるイディッシュ語の領域に属するものと母子関係を通して描かれるものとの結びつきを整理しつつ、更には離散(Diaspora, Estrangement)によってもたらされるその土地の言葉(ユダヤ系アメリカ文学の場合、英語)の影響が家族と言語の問題にどのように作用するのか明らかにしてきた。

これら二つの課題研究にも通底する本研究課題の学術的な核心をなす問いは、なぜ、ユダヤ系アメリカ文学における詩の系譜は不在であるのかというものである。逆説的に言えば、この「不在」ゆえに、この二つの研究課題では、バラッドやイディッシュ語、母といったユダヤ系アメリカ文学のみならず、ユダヤ文学の詩において周縁に置かれてきたものが中心テーマになったのである。本研究課題にとくに焦点を当てれば、「ユダヤ系アメリカ文学における詩の系譜の不在」は伝統的な祈禱や慣習や言語などユダヤ的な素材を用いながらも、その意味を漂白したり、まったく別の目的で用いたりするような、援用と逸脱によってその系譜が紡がれてきたからではないかというものである。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は「ユダヤ系アメリカ文学における詩の系譜の不在」を前景化し、ユダヤ文学の詩における伝統の援用と逸脱に注目しながら、それらがユダヤ系アメリカ文学における詩の系譜にどのように反復されているのかを具体的に検証して、最終的にはユダヤ系アメリカ詩の伝統なユダヤ的素材の援用と逸脱の系譜を明らかにするものであった。

ユダヤ系アメリカ詩人を研究対象にする意義を述べるにあたり、まずは「ユダヤ系アメリカ文学」というジャンルの妥当性に触れる必要がある。現在、ユダヤ系アメリカ人と呼ばれる人々のほとんどが19世紀末から第2次世界大戦終戦にかけて、東欧・ロシアからの移民やホロコーストから逃れてきた人々にルーツを持つ。二世作家達が活躍し、散文のジャンルで「ユダヤ系アメリカ文学」は、20世紀中頃に注目を浴び多に研究された。しかしながら、ユダヤ系アメリカ人がアメリカのなか社会的にも経済的にも上昇するにつれ、ユダヤ系の小説家たちは「ユダヤ系」の形容詞なしで「アメリカ文学」として読まれるようになった。現在では、小説において「ユダヤ系アメリカ文学」というくくりは、一定の役目を終えているように見えた(これについては後述する。)しかしながら、現在でもユダヤ系アメリカ人詩人・作家のなかで、敬虔なユダヤ教徒でもなければ、ユダヤ人であることにあまり重きを置いていないように見えるものたちの多くが、ユダヤの伝統や慣習、歴史や言語を本来の意味とは違うように援用し、コミュニティやユダヤのアイデンティティに重点を置くのではなく、より個人的なアクトチュアルな問題を扱った作品を書いている。従って、ユダヤの伝統的な意味合いを逸脱した、ユダヤ的な装置を使った作品は小説でも詩でも創作され続けており、援用と逸脱を前提とした「ユダヤ系アメリカ文学」というくくりは今でも有効だと考える。

とりわけ、ユダヤ系アメリカ詩において、ユダヤ的な素材を逸脱しながら援用することは、旧約聖書のユダヤの詩からに遡ることができる。ユダヤ詩が系統的に読まれてこなかったのはユダヤ文学全般において、常に散文が中心的な位置を占めるのに対し、詩は周縁的な沈黙のなかに置かれてきたからである。このユダヤ詩をめぐる沈黙は、ユダヤ的なダイナミズムに深く関わっている。ユダヤ詩の伝統は旧約聖書のヤハウェの言葉にその契機を辿ることができる。出エジプトの後、イスラエルの民は神との契約を忘れるようになった、とヤハウェは憤怒する。そして民が神を忘れるたびに、彼らに離散の運命を罰として科すことをヤハウェはモーセに申し渡す。このヤハウェの怒りに直面し、見知らぬ土地へと離散した民は、そこでヤハウェを想起し祈りを捧げる。この祈りこそがユダヤの詩の原型だと Maeera, Y. Shreiber は述べる。ヤハウェの怒りと離散という構造は、離散の末、民がようやくたどり着いた異国の地で、同化というある程度は不可避な経過を辿るたびに繰り返される。ヤハウェは、神を忘却した（すなわち同化した）罰としてユダヤの民を離散させ、神を深く記憶に刻み込むように厳命する。ユダヤ詩はこのような「記憶と忘却のダイナミズム」に深く根ざしており、詩のモチーフや構造自体もユダヤの素材を援用されつつも逸脱が起こり、断片化・周縁化される傾向にある。それゆえに、ユダヤの詩は「ユダヤ系（文学）」という全体を貫く視座のもと語られにくく、散文に比べて周縁的な位置に留まってきた。

同時に、ユダヤ詩はヤハウェの「記憶と忘却のダイナミズム」に深く関係しているがゆえに、極めてユダヤ的な契機に基づく傾向が逆説的に指摘できる。この契機は、ユダヤの詩と散文を分かち、同時にユダヤ詩と伝統的な英詩を分かちつものにもなる。そのため、「ユダヤ系」という視座はとりわけユダヤ詩においては非常に有効である一方、その有効性・重要性に比して、ユダヤ詩が周縁化され系譜化されない要因にもなった。

ユダヤ文学は時間的にも地域的にも言語的にも広がり大きい。そこで本研究では、ユダヤ系アメリカ文学を射程に、ユダヤの祈禱カディッシュ (Kaddish) を援用した詩に注目することから始めた。一般的なカディッシュは the mourner 's Kaddish と呼ばれ、通常、親の死に際して男の長子が 10 人の男性で構成される minyan という集団と共に唱える祈禱である。特に第二次大戦後、ユダヤ系アメリカ人によってカディッシュを援用した詩が多く書かれてきた。これらがより周縁化された書き手（例えば、俗なる言語とされるイディッシュ語で詩を詠う者や世俗的な役割を負った女性、あるいは離散/同化によって離散先の言語で詩を詠む者）によってどのように援用されるか、どのようなヴァリエーションが生み出されてきたのか再検討しながら、ユダヤ系アメリカ詩人がユダヤ詩の伝統をどのように援用・反復・逸脱しているのかを辿る。カディッシュは人間の死というパーソナルな出来事が神への感謝というよりフォーマルな契機に接続する場となるため、世俗的な、周縁化された声とユダヤの神への祈りというフォーマルな声との関係性が前景化しやすい。だからこそ、多くのユダヤ系アメリカ詩人によってカディッシュが詠われてきた。

しかしながら、研究遂行と同時進行的に若手のユダヤ系アメリカ小説家のなかでイスラエル・パレスチナ・あるいは第二次世界大戦後のアナザーワールド「アラスカ」など地理的な広がりをもつユダヤ系アメリカ文学の意味をもう一度問い直す動きがでてきた。その中でカディッシュを直接的・逸脱的に扱う小説を書く作家もいたため、「ユダヤ系アメリカ詩の伝統なユダヤ的な素材の援用と逸脱の系譜」に散文との交差の視点を取り入れることによってより複雑なヴィジョンが示せるように目的を微調整した。

モダニズム期の詩人チャールズ・レズニコフとビート詩人の中心的人物であるアレン・ギンズバーグの手による、個人的な母の詩を契機に詠まれた二つのカディッシュを中心に、加えてそれまでカディッシュの詠い手として除外されてきた女性たちの手によるカディッシュが戦後、数を多く書かれたことに注目し、個々の詩の具体的な分析とユダヤの詩の伝統とのかかわり合いを明らかにし、ユダヤ系アメリカ詩の援用と逸脱のパターンを探り、最終的にはこれまで断絶されてきたユダヤ系アメリカ詩の系譜を明らかにする方法をとるものであった。結果的に、研究課題推進中に現在進行形で、役割を終え途絶えたように見えた「ユダヤ系アメリカ小説」が、若手のユダヤ系アメリカ小説家のなかでイスラエル・パレスチナなどを射程に入れることによって現在において「ユダヤ系アメリカ文学」が必要であり、責任があることを訴えるような作品群がでてきた。そのなかには、ネイサン・イングラnderのようにカディッシュを直接的・逸脱的に扱う小説を書くものもいたため、「ユダヤ系アメリカ詩の伝統なユダヤ的素材の援用と逸脱の系譜」に加えて「同時代ユダヤ系アメリカ小説」との交錯という視点も取り入れて研究を遂行した。

4. 研究成果

初年度である 2018 年度は検証の手始めとして、アレン・ギンズバーグがどのようにカディッシュを援用・反復・逸脱しているのかを探った。その一つの成果として、「“ You Still Haven ’ t Finished with Your Mother ” Allen Ginsberg の “ Kaddish ” における離散・忘却・邂逅」（日本アメリカ文学会東京支部『東京支部会報 アメリカ文学』79 号）を出版した。本稿では「部屋の夢」というモチーフを媒介に、「離散」を前提条件としたユダヤ詩の基本形を確認し、統合失調症を患っていた母親ネオミ追悼の長篇詩 “ Kaddish ” において、母の個別の姿を回復する試みがどのようにユダヤ詩の基本形を援用し展開されるのか検討した。具体的には、ギンズバーグは家へ辿り着かない夢をよく見、「部屋の夢」と名付けてしばしば詩に援用した。本稿では、家への志向と忌避という相反する行為で構成される「部屋の夢」というモチーフを媒介に、「離散」を前提条件としたユダヤ詩の基本形を確認し、統合失調症を患っていた母親ネオミ追悼の長篇詩 “ Kaddish ” において、母の個別の姿を回復する試みがユダヤ詩の基本形を援用し展開されるのか検討した。

2 年目である 2019 年には、アメリカ合衆国ニューヨークに行き、コロンビア大学やニューヨーク市立図書館などでアレン・ギンズバーグと母ネオミの往復書簡をはじめ、ギンズバーグ関連の資料やユダヤ系女性とカディッシュの関連を探る資料などを手に入れた。またユダヤ系の独自性をより検証するために、日本や英語圏の詩や文学の資料なども入手し研究を進めた。また役目を終えて途絶えていたように見えた「ユダヤ系アメリカ文学（散文）」に若手のユダヤ系アメリカ小説家たちが必然性・責任を感じながら「ユダヤ系アメリカ小説」を書いていることに気づき、カディッシュや伝統的なユダヤ的素材の援用・反復・逸脱においてユダヤ系アメリカ詩とユダヤ系アメリカ小説は交差しているのではないかという視座を得る。

3 年目である 2020 年は、その新たに得た視座をから、ユダヤ系アメリカ人の小説家ネイサン・イングラnderの執筆した小説をにおいてカディッシュがどのように援用され、逸脱されているかを研究のメインにおいた。イングラnderは本科研のプロジェクトが始まった直後 2019 年に *Kaddish.com* というタイトルの長編小説を出版し、また遡って 2012 年に出版した短編集所収の "Sister Hills" でカディッシュを非常に重要な小道具として利用している。ユダヤ系アメリカ小説は、かつては出版市場のジャンルとしても研究対象としても確立されたものだったが、時代を経てユダヤ系アメリカ人がメインストリームに確固たる位置を獲得するに従って「ユダ

ヤ系」という冠を外して論じられることが多くなった。この点がユダヤ系アメリカ詩とは事情を異にするとされていた。しかしながら、ネイサン・イングラダーをはじめ、イスラエルのようにアメリカ以外にその地理的想像力を広げることによって「ユダヤ系」アメリカ小説を意識的に執筆する小説家たちが現れた。そこで、2020年度はネイサン・イングラダーの短編 "Sister Hills"を中心に、そのなかでカディッシュがどのように援用・反復・逸脱しているのかを検討し、論文「ネイサン・イングラダーの"Sister Hills"におけるカディッシュの正統的継承と逸脱」を出版した。

イングラダーの研究を通して、アメリカ以外にその地理的想像力を広げることによってユダヤ系アメリカ文学を現在形で問い直す作家たちの視線を研究に取り込むことができた。とりわけ、イスラエル（パレスチナ）を含めることは「悼む」ことへの葛藤を生む。ユダヤ人に対する迫害の歴史やホロコーストは否定されるものではないが、一方でそれらを考えるときにますます苛烈になるイスラエルとパレスチナの問題をどのように捉えればいいのか、葛藤を抱える発話や表象が近年ますます増えてきた。

最終年度では、カディッシュの援用・反復・逸脱を考える際に上記の視座を得て、ユダヤ系アメリカ人作家マーティン・シャーマンの戯曲『ローズ』を研究対象に加えた。『ローズ』は、かつてナチスの収容所から生き延びエクソダス号に乗ってパレスチナを目指しながらも、アメリカにたどり着いた80歳のユダヤ系女性ローズが主人公である。彼女は、イスラエル人によって殺されたパレスチナの少女のために、「シヴァ」というユダヤの弔いの儀礼を行っている。『ローズ』については本務校のリレー講義の一環ではあるが、迫害やホロコーストを経験してきたユダヤの「弔い」や「悼み」が、葛藤をとしてより開かれ普遍的なものにつながる可能性を論じて講義した。カディッシュに接合しながら今後、論文にするつもりである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 宮本 文	4. 巻 52 (1-2)
2. 論文標題 ネイサン・イングラダーの“Sister Hills”におけるカディッシュの正統的継承と逸脱	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 武蔵大学人文学会雑誌	6. 最初と最後の頁 101-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮本 文	4. 巻 79
2. 論文標題 「"You Still Haven't Finished with Your Mother"--Allen Ginsbergの"Kaddish"における離散・忘却・邂逅」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京支部会報 アメリカ文学	6. 最初と最後の頁 68-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------